

広島市立大学塾 2期生

沖縄研修報告書



平成31年(2019年)2月27日~3月4日

もくじ

1. 沖縄研修日程	1
2. 歩行ルート及び訪問箇所	4
3. 参加者レポート	
(1) 私が沖縄で見たもの	5
長澤 俊平 国際学部 国際学科 2年	
(2) 歩く速さで命を見つめる	7
中島 弘深 国際学部 国際学科 2年	
(3) 沖縄を歩いて	9
丸 照正 情報科学部 知能工学科 2年	
(4) 沖縄を巡って初めて知る	12
齊藤 秀太 国際学部 国際学科 2年	
(5) フィールドワークの大切さ ―「沖縄を歩く」を通して―	15
池田 千夏 国際学部 国際学科 2年	
4. 体験者等の講話	
(1) 翁長 安子 さん 【長岡隊での活動】	18
(2) 中山 きく さん 【白梅学徒隊について】	28
(3) 翁長 安子 さん 【遺骨収集活動】	33
(4) 伊佐 真一郎 さん 【沖縄戦上陸、嘉手納基地など】	42
(5) 大田 光 さん 【一中学徒隊と養秀会館について】	51
5. 広島市立大学塾 沖縄研修 報告会	
「オキナワを歩きながら考えた ―過去・現在・未来―」	58

沖縄研修日程

2月27日(水) 1日目歩行距離 6.2キロ

【広島空港】 11時35分発 ANA1861便

【那覇空港】 13時35分着

→ 対馬丸記念館 5.0キロ

【対馬丸記念館】

広島経済大学 岡本ゼミ学生による「広島の対馬丸」発表
その後館内見学

→ 沖縄オリエンタルホテル 1.2キロ

2月28日(木) 2日目歩行距離 17.1キロ(累計23.3キロ)

【沖縄オリエンタルホテル】

→ 松川樋川 2.8キロ

【松川樋川】

「長岡隊への入隊と水汲み、食料運びなどの様子について」 翁長安子さん 講話

→ 首里観音堂 0.7キロ

【首里観音堂】

「首里攻防戦の様子について」 翁長安子さん 講話

→ 安国寺 0.6キロ

【安国寺】

「安国寺壕での様子、南部への逃避について」 翁長安子さん 講話

→ 一中健児之塔 → 県庁壕(シッポウジヌガマ) 1.4キロ

【県庁壕(シッポウジヌガマ)】

地元のボランティアガイド 柴田一郎さん 繁多川公民館の南信乃介館長の案内で県
庁壕の見学

→ 南風原文化センター 4.0キロ

【南風原文化センター、南風原陸軍病院壕】

南風原文化センター、南風原陸軍病院壕の見学

→ 浄土寺 6.3キロ

【浄土寺】

歩兵第八十九連隊の菩提寺である浄土寺を参拝

→ 糸満青少年家 1.3キロ

【糸満青少年の家】

「遺骨収集活動について」 南埜安男さん 講話

3月1日(金) 3日目歩行距離 25.9キロ (累計 49.2キロ)

【糸満青少年の家】

→ 歩兵第八十九連隊玉砕終焉之碑 4.6キロ

【歩兵第八十九連隊玉砕終焉之碑】

「父へ慰霊と遺族としての活動について」 渡辺徹子(あきこ)さん 講話

→ 白梅之塔 1.7キロ

【白梅之塔】

「白梅学徒隊について」 中山きくさん 講話

次の戦跡、慰霊碑を慰霊、参拝

→ 山形の塔 → バックナー中将慰霊碑 → 轟の壕 (2.2キロ)

→ 糸洲の壕(ウッカーガマ) → 糸洲第二外科壕 (1.0キロ)

→ 陸軍病院山城本部壕 → 伊原第一外科壕 (1.1キロ)

→ ひめゆりの塔 → 梯梧之塔 → ずみせんの塔 (0.6キロ)

→ 魂魄の塔 (1.2キロ) 6.1キロ

【魂魄の塔】

「遺骨収集と慰霊碑の建立について」 翁長安子さん 講話

次の戦跡慰霊碑を慰霊、参拝

→ ひろしまの塔 → 荒崎海岸 → 沖縄師範健児之塔 4.4キロ

【沖縄師範健児之塔】

「戦後74年、沖縄戦からの教訓に立って」 古堅実吉さん 講話

次の戦跡、慰霊碑を慰霊、参拝

→ 第三十二軍最終司令部壕 → 全学徒隊の碑 → 平和の礎 1.0キロ

平和公園から糸満青少年の家へ 徒歩および車両搬送 8.1キロ

【糸満青少年の家】

「沖縄の特攻について」 辻直子さん 講話

3月2日(土) (貸し切りバスで移動)

糸満青少年の家 → 北谷町 砂辺馬場公園 → 道の駅かでな

→ 沖縄市戦後文化資料展示館ヒストリート → 沖縄国際大学 米軍ヘリ墜落現場

(車窓から見学) → 嘉数高台公園 → 養秀会館 → 沖縄オリエンタルホテル

【北谷町 砂辺馬場公園】

「沖縄上陸作戦について」 伊佐真一朗さん 講話

【道の駅かでな】

「嘉手納基地について」 伊佐真一朗さん 講話

【沖縄市戦後文化資料展示館ヒストリート】

「戦後の沖縄の生活について」 伊佐真一朗さん 講話

【嘉数高台公園】

沖縄国際大学スマイライフによるカイド

普天間基地、トーチカ、京都の塔、嘉数の塔、青丘の塔

【養秀会館】

「一中学徒隊と養秀会館について」 大田光さん 講話

3月3日(日) (ジャンボタクシーで移動)

沖縄オリエンタルホテル → 荒崎海岸 ひめゆり学徒散華の跡

→ ひめゆり平和祈念資料館 → 平和祈念公園 (沖縄平和祈念資料館、平和の礎)

【荒崎海岸 ひめゆり学徒散華の跡】

解散命令が出た後、南端の海岸まで逃れた学徒隊 (引率教師 1 名、学徒 11 名) が昭和 20 年 (1945 年) 6 月 21 日に体験したことをもとに、「その時あなたならどうするか」ロールプレイングを実施。

【ひめゆり平和祈念資料館】

沖縄戦が始まる前の学校生活にも留意して見学

【平和祈念公園】

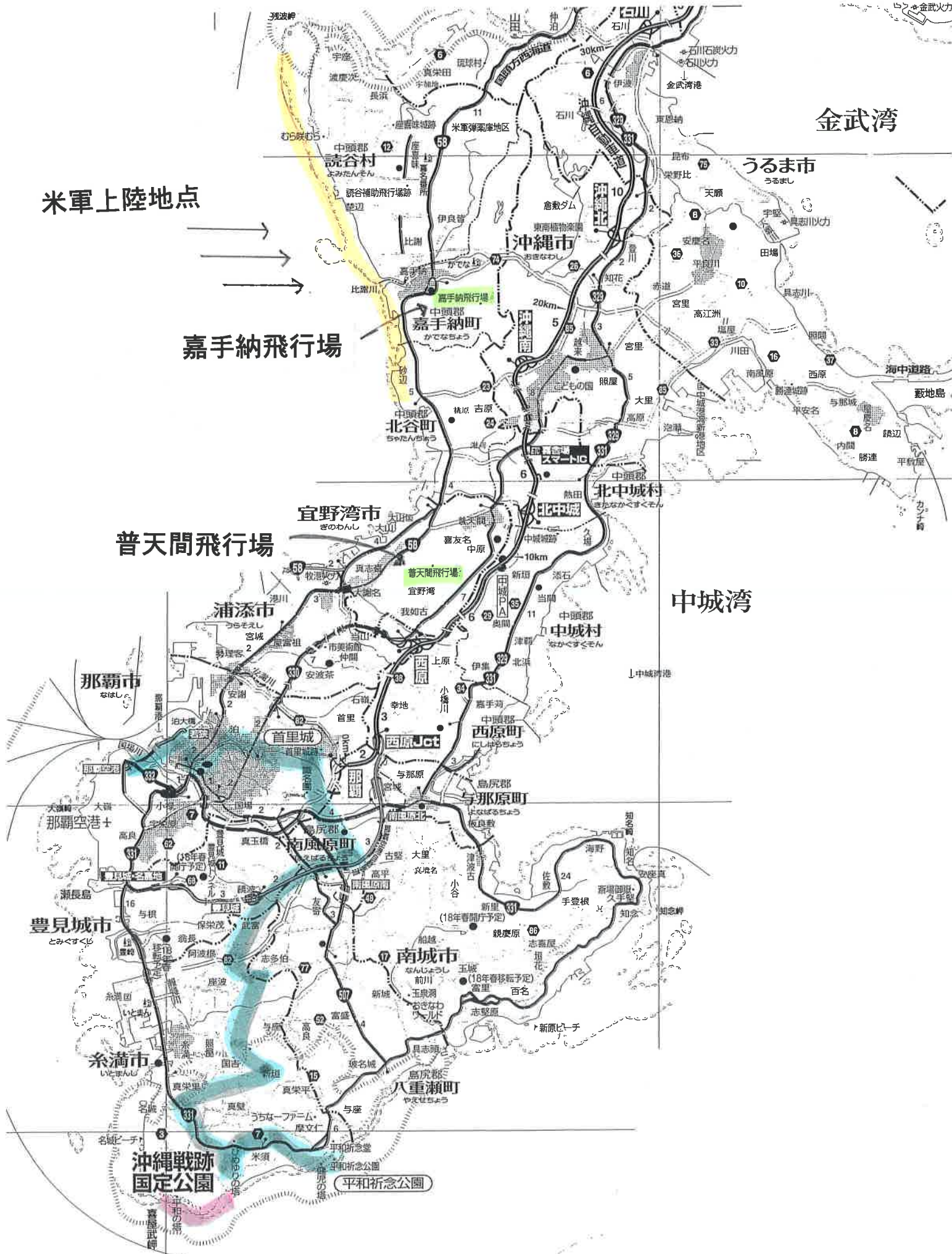
指定された平和の礎に刻まれる戦没者について、平和祈念資料館でその方が亡くなる際の状況を調べ、その方が刻銘された礎の前でその状況をガイドする。

3月4日(月)

【那覇空港】 15時55分発 ANA1862便

【広島空港】 17時40分着

* 1日目(2月27日)から4日目(3月2日)までは広島経済大学岡本ゼミの「第13回 オキナワを歩く」に参加させていただいた。5日目(3月3日)は広島市立大学塾独自で実施した。



米軍上陸地点

嘉手納飛行場

普天間飛行場

金武湾

中城湾

沖縄戦跡
国定公園

平和祈念公園

私が沖縄で見たもの

国際学部国際学科2年

長澤 駿平

今回の沖縄研修で、私は人生で初めて沖縄に行った。これまで自分が抱いていたイメージ通りの沖縄と、自分が知らなかった沖縄の両方が見れたいい機会になったと思う。また、広島経済大学をはじめとする普段なかなか交流する機会がない他大学の学生と共に過ごした6日間は非常に有意義なものだった。

特に沖縄国際大学のサークル『スマイライフ』の活動には感銘を受けた。研修前に沖縄についての事前学習を行っていたとは言え、まだまだ沖縄や沖縄戦について詳しくなかった自分たちにも理解できるように、分かりやすい解説でガイドしてくれた。彼らのおかげで私たちは沖縄について誤解することなく、正しい知識を得ることができたし、何より彼らのガイドからは沖縄県民としての誇りが感じられた。それは単に“地元愛”の一言では言い表せないものだったと思う。

今回の研修で戦争体験者の証言や記録が、戦後74年経つ現代では非常に貴重なものであるということを再認識した。そして今を生きる私たちには、戦争を生き延びた人々や死んでいった人々の意思、「戦争をしてはいけない」という意思を引きつぎ、未来に伝える責任があることを学んだ。スマイライフの学生はそのことを自覚しているからこそ、彼ら



のガイドには誠実さがあり、聞いている人々も関心を持って耳を傾けるのだろう。

沖縄での6日間は毎日が新しい発見と学びの連続でどれも印象的だが、特に印象に残っている経験は壕に入ったことだ。「沖縄を歩く」のプログラム中にはいくつかの壕に実際に入ることができたが、あの外界とは全く異なる独特の空間はこれまでに経験したことのないものだった。中に入ると足場は泥水でドロドロ、頭上は尖った岩が突き出ている腰を曲げないと進めない状態だった。そして壕の奥まで入ったところでガイドさんの指示で懐中電灯を消すと、周囲は一瞬で闇に包まれた。この時の感覚は研修後の今でも鮮明に記憶している。明かりを消すまでは周りが見えていた学生が消した瞬間に見えなくなり、まるで壕の中に一人取り残されたような孤独感に襲われた。「戦時中の日本兵たちもこうしてアメリカ兵に捕まらないように息を潜めていたのだろうか」と想像した。

壕にいる間、研修前の事前学習で読んだ『沖縄のこころ』を思い出した。それには壕の中で日本兵が瀕死の状態で苦しんでいたことや彼らをを必死に看病する看護師たちの様子が書かれていたが、自分が実際に壕に入ってその場所の空気を吸ったことで初めて当時の彼らの感覚に近づけた気がした。自分が今いるこの場所に、74年前国のために命を懸けて戦った人々がいたという事実が胸に突き刺さり、ある種の興奮を覚えた。

昨年12月の対馬丸関係者の方々のお話に始まり、今回の沖縄研修ではたくさんの戦争体験者による、生のものを含む多くの証言や記録を見聞きすることができ、どれも非常に貴重な経験だった。今回の研修で得たものは、普通の大学での座学では決して得られなかったものだ。まさしく「百聞は一見に如かず」で、又聞きした話と自分が実際にした体験とでは人生における価値にも、記憶への残りやすさにも雲泥の差がある。私が沖縄で見たものにはできれば見たくないものもあった。壕に入っているときも、足腰の辛さよりもその場の息苦しさで一刻も早く壕を出たくなった。5日目に訪れた平和祈念資料館で見た、子どもの死体に虫がたかる写真は一生忘れられないだろう。しかし、それと同時に見てよかったとも思うのだ。というよりも、“見なければならなかった”と表現する方が正しいのかもしれない。広島経済大学の岡本教授もおっしゃっていた通り、今を生きる人間が戦争を経験した人々に目を向け、耳を傾けなければ、彼らの存在は誰の記憶にも残らず、時代とともに消えてしまう。

私たちは資料館で当時の様々な記録を見た。そして、平和の礎に名前を刻まれた約20万人の犠牲者一人ひとりに特別なストーリーがあるということを実感した。彼らのストーリーを考えた時に私が一番思うのは、死ぬとき彼らは何を思って死んでいったのか、ということだ。国の命令で招集され、戦い、死んでいった彼らだが、彼らは果たして自分がなぜ戦っているのか、何のために戦っているのか、何と戦っているのかをはっきりと自覚していたのだろうか。もし、自分が当時の兵士ならそれらが分からないまま死ぬことは絶対にできない。死ぬときに何を恨めばいいのかもわからないまま死んでいくことはとても虚しいことだと思うからだ。彼らが彼らなりに納得できる最期を遂げることができたと思いたい。それを確かめることはもうできない。しかし、私たちが彼らの経験から学び二度と

戦争をしないこと、そして彼らが守ってくれた日本をより素晴らしい国にしていくことが、せめてもの彼らへの報いとなるのであれば幸いである。

まもなく日本は新元号を迎え、戦争のことは今よりもさらに昔のことに感じられるようになるだろう。それは裏を返せば日本がそれだけ長い間戦争をしていないことを意味し、喜ばしいことでもあるのだが、人々が戦争の恐ろしさを完全に忘れてしまった時、過ちは繰り返される。特に戦争を経験していない私たちの世代は、そのことを肝に銘じておかなければならない。私も平成最後の年に過ごした沖縄での6日間は一生忘れない。

歩く速さで命を見つめる

国際学部国際学科2年

中島 弘深

3日間、水とポカリとカロリーメイトのみで沖縄を歩く。わたしにとってこれは未知の世界だったのでどうなってしまうのだろうと不安半分、自信半分で臨んだこの研修を終えてまず思った。何事も意外とどうにかなる。実際に歩いているときはものすごく長く感じて、「あとどれくらい歩けばいいんだろう」とか「つかれた」とか弱音を吐くこともあったけれ



ど終わってみれば意外とあっという間だったし、初めは不満だったカロリーメイトも「意外といけるじゃん」に変わり最終的には楽しみとさえ思うようになったし。「どうにかなる」でどうにもならないことも多分あると思うが、「人生どうにかなる」と少しだけ大きな心で構えられるようになった気がする。

また、今回の研修のリーダーを務めてくださったのが広島経済大学岡本ゼミナールの4年生の方だった。とても面白い方で、いるだけで周りが明るくなるような方だなあと感じた。歩くときに間が離れていたら声を掛けたり、周りを励ましたり、夜遅くまで残ってごみを片付けてくださったりした姿に、リーダーってこういう人なのだと改めて確認した。

ここまでは、私の人生観の変化、リーダー像の再認識についてであったが、ここからは実際に戦地となった地を歩いたり、お話を聞いたりした中で印象に残っていることを記す。

私は広島県出身で、幼い頃から広島原爆について勉強してきたが、沖縄戦はそれらとは全く別物であるということに驚いたし、沖縄戦について何も知らなかった自分を恥ずかしく思った。まず、日本本土では空襲による被害が大きかったが、沖縄では地上戦が行われた。空からの攻撃、陸からの銃や大砲、火炎放射器による攻撃、海からの艦砲射撃。10代前半の子どもや住民も「義勇隊」「学徒隊」として足りない軍人の代わりをさせられた。

中でも印象に残っているのが、宮平盛彦さんのお話である。お話は宮平さん自身ではなく女性の方がしてくださった。14歳で一中学徒隊として戦場にかり出された。6月の終戦を知らず、11月まで壕に隠れ、投降を呼びかけた日本兵2人を一緒に壕にいた日本兵らが撃ち殺す現場にも遭遇したそうだ。あの時止められなかったという自責の念はどれだけ時を経ても消えることはない。また生き延びた人の苦しみが終わることはなく、戦争体験を話すことができない方もたくさんいることを改めて知り、これまでお話をしてくださった戦争体験者の方への感謝の気持ちとともに、思い出させてしまって申し訳ないという気持ちがこみあげてきてどうしようもなかった。どれだけたくさんの戦争体験を聞いても、戦場となった地を実際に見ても、戦争を体験した方々の辛さやひもじさ、むごさのすべてを感じるができるわけではないけれど私たちができる限りのことを伝えていかなければと思う。

また、私たちと同世代の子にガイドをしてもらったのが大きな刺激になった。自分たちが住む地をもっと知りたい、伝えたいという思いがガイドを通して伝わってきた。沖縄国際大学に通う学生たちが沖縄についてこんなにも深く考えながら勉強していることや、同世代の子たちが自ら平和のために活動していることに感化されたし私も何かできることを見つけようと励みになった。彼らが嘉数高地のガイドをしてくれたときに言っていた言葉がとても印象に残っている。「今も地中には亡くなった方の骨がたくさん埋まっていたり、不発弾が爆発したり、米軍基地があったり（しかも普天間基地はクリアゾーンが守られていない）、ヘリコプターやその部品が落下・墜落したり、果たして本当にこの状態を「平和」といえるだろうか？もしも自分の住む土地に基地があったらということを考えてほしい。」また、別の学生の「もしも自分だったらどうするか考えてみて」という問い。同世代の子に言われたからか、とても重みのある言葉だった。私は基地のそばで暮らしたことがないので

それがどれ程辛いものかわからないし考えたこともない。しかし彼らの問いたちに、痛いほど考えさせられた。基地問題は沖縄の問題ではなく、私たちも考えなくてはならない問題なのだ痛感した。沖縄は今ままで幸せなはずがないと私は思う。「ヘリコプターの音が聞こえるのが日常」とも彼らは言っていて、ではどうしたらいいのか調べ、考えれば考えるほど分からなくなっていく。自分には何ができるのか、答えがなかなか出ない。これからより深く考えて答えを見つけない。また彼らがお薦めしてくれた「洗骨」という映画も鑑賞したいと思う。

19年間生きてきた中で、こんなにも深く戦争、そして平和に向き合ったのは今回が初めてかもしれない。「オキナワを歩く」に参加して本当に良かった。今を生きるすべての人にも経験してほしいくらいである。沖縄を学びたいと思うようになったし、自分も広島のことをもっとよく知り伝えたい。

沖縄を歩いて

情報科学部知能工学科2年

丸 照正

沖縄を歩いた。

沖縄に触れた。

沖縄を考えた。

沖縄を知った。

人生観が変わる5泊6日の旅だったと思う。事前学習を本、映像、新聞などを通して行って現地へ行った。しかし、実際に体験した人の話や、今も残っているガマや戦跡を目の当たりにすると言葉にならないような感情がこみ上げてきた。私が1年後期の集中講義で履修した法学（日本国憲法）の先生が言っていた、「広島人はヒロシマのことだけを知って、平和を知っているつもりになっている」という言葉の真意というものが分かったような気がする。全然沖縄戦について知っていなかった。知ろうともしていなかったのかもしれない。

●青春＝戦争

「私たちの青春は、戦争だった」という言葉が心に残っている。青春とは何なのか。恋愛して、部活して、遊んで……。今の時代からは考えられないような青春が74年前には存在した。雨のように降り注ぐ銃弾の中を逃げまどっていた。毎日が死と隣り合わせ。考えるだけでぞっとしてしまう。当時の人は何を考え、どう生きていたのか。89歳になった今でも、「自分は生かされた」と当時の経験を2本の脚でしっかりたち、一生懸命語る姿に戦争というものの愚かさというものを伝えなければならないという意思の強さを感じ、受け止めることができたように思う。

●50 kmを歩いて

3日間、カロリーメイト、ポカリスエット、水だけですごし、さらに約50 kmを歩くのはとてもきつく、こういう機会がないと今後やることはないと思う。しかし、これは私にとってとてもいい経験になったと思う。那覇空港から南風原を経由して糸満へ。このルートは当時の沖縄住民が米軍から逃げるために通った道と同じである。たくさんのガマや壕を見ながら移動した。雨が降ったり、汗ばむほどの気温になったりと沖縄の天気は変わりやすかった。

沖縄戦の時期は梅雨。沖縄を歩く2日目は昼過ぎから雨が降り出し、カップを着ての移動となったがとてもしんどかった。しかし、当時はちゃんとした着るものも、靴も食べ物もない状態。カップなんてあるわけもない。今を生きる私たちがどんなに恵まれているかを改めて感じた。

3日目の夜、久しぶりにごはんを食べたとき、とてもおいしく感じた。食堂に何気なく貼ってあったポスターに「食べ物一つひとつには大事な命が宿っていてそれをいただいています。感謝しながら残さず食べよう」という文字が書かれていた。50キロ歩く前ならこのポスターに何の興味も示していないと思う。しかし、50キロ歩き、生死について考えたからこそこの言葉に惹かれたのだと思う。当たり前には食べられている今。当たり前の幸せを感じていきたいと考えた。

●ひめゆり

市大の独自プログラムとして、荒崎海岸とひめゆり平和祈念資料館へ行った。荒崎海岸ではひめゆり学徒隊の生徒と教員が自決した場所でロールプレイングを行った。自分は生徒役を選んだ。選択肢としては、投降するか、周りの様子を見るか、自決するかの3択。自分は先生の指示に従うとして、先生が投降したため自分も投降した。

私がそのように考えたのは、当時の教育として天皇万歳、戦争は勝つべきもの、投降などしてはならないなどと学校の先生から教わってきた。追い詰められた場面において、先生がその場にいた場合、先生が自決しようと言うのであれば自決するであろうし、投降しようと言った場合でも同じようにしていたと思う。結論、当時の生徒には自分の意思というものがないかと思ったのではないかと考えたからである。そのように自分の意思が通せない教育をしてしまったのも間違いの1つではないか。

その後、祈念資料館へ移動し見学。その展示の中で、ひめゆり学徒一人ひとりの顔写真と亡くなった場所、人柄などが書かれている場所があった。その中で「荒崎海岸で自決」と書いてある人を見つけた。1時間ほど前にいたあの場所で、何を考えていたのか、どういう思いだったのか、などと考えていると涙が止まらなかった。自分たちよりも若い年齢で…。胸が締め付けられるようだった。

● 同年代の思い

沖縄をあるくには沖縄国際大学のスマイライフの人も一緒に行動した。普天間基地のすぐそばに位置する沖国。米軍ヘリが講義棟へ突っ込んだこともある。その普天間基地を見ることができる展望台でスマイライフによるガイドを受けた。その中で基地問題についてもしっかりと自分の意見を持っており、それを発信できていることに感銘を受けた。沖縄戦経験者だけではなく、若い世代も沖縄戦についての問題は今も続いているという認識を持っていることがすごいなと思った。



● これから

沖縄についてとても深く学ぶことができたと思う。広島での平和学習は小中高とずっとやってきた。しかし、この5泊6日の沖縄研修を通して改めてヒロシマについて学びたいと思った。広島は沖縄の基地問題のように現在も続いている問題というものは少ない。しかし、被爆者の高齢化や伝承者の育成不足が問題としてある。まだ、被爆体験を聞ける今だからこそできることを思うだけでなく、行動に移していきたい。

沖縄を巡って初めて知る

国際学部国際学科 2 年

齊藤 秀太

平成 31 年 2 月 27 日（水）～3 月 4 日（月）5 泊 6 日で沖縄にて研修を行いました。最初の 3 日間は徒歩で沖縄南部を巡礼し、4 日目は現在進行形である嘉手納基地や普天間基地の周辺を訪れました。5 日目は、荒崎海岸やひめゆり平和祈念資料館、平和祈念公園で広島市立大学塾独自で研修を行い、6 日目は沖縄で自由行動をしました。

オキナワを歩く（1 日目～3 日目）

オキナワを歩くでは、沖縄市、南風原町、糸満市と沖縄戦で日本軍が南部へ撤退したように、南の方へ下って歩きました。その中で、複数の沖縄戦経験者から当時の話を聞くことが出来き、特に印象に残ったのが、翁長安子さんによる話です。

翁長安子さんは 15 歳、最年少で長岡隊に水汲み・飯運びの係として入隊しました。そして、長岡隊におられた頃の話が衝撃的でした。

それは 1945 年 5 月 28 日のこと。長岡隊は最後まで首里を守るため、首里の近くにある安国寺の壕に入っていたのですが、その日は戦車攻めてきて、戦車砲を壕の中に撃ち込まれたそうです。戦車砲の後は火炎放射器出入り口の土嚢などが燃え始め、中まで火が移ってきました。壕の中は煙が充満して、息苦しくなり、追い打ちをかけるように黄リン弾が投げ込まれたとおっしゃっていました。隣にいた兵隊さんが直撃を受けて暴れながら燃えていく中、防毒面を被って、窒息を防いだそうです。しかし、その後、戦車に馬乗りをされ、ババーンという大きな音で壕が爆破され、意識を翁長安子さんは失いました。時間が経って意識が戻り、夜に長岡隊は壕を脱出することになったのですが、壕の入り口を出た時、恐ろしい情景だったと聞きました。その情景とは、首が壁にポンとくっついていたり、中身の破裂した人がいたり、手足が周りに散っていたりと、地面は死の海。そこから、少し歩き、黒い岩と思ってそこに足を置いたら死体で、転んで崖から転び落ち、上で待機しているアメリカ兵の自動小銃の乱射を受けました。

このような凄惨な話を聞き、沖縄研修 2 日目から聞き、沖縄という認識がガラッと変わりました。リゾート地というイメージがやはり強い沖縄でしたが、壮絶な戦場であったというイメージが焼きつきました。翁長安子さんの話はフィクションであるのかとってしまうくらい悲惨で、現実起こったことだと思えば寒気がします。そして、当時をご経験された方がとても高齢であり、目の前に立ってお話してくださっているという状況に、このような体験は今後できることが少ないだろうと感じました。今日が戦争体験を語り継ぐ重要な節目であるということを確認しました。

次に、沖縄の歩く中では、県庁壕や轟の壕など、数カ所の壕やガマを訪れました。そして印象に残った壕は、沖縄陸軍病院南風原壕群 20 号です。南風原の壕は日本軍が南部撤退を

する前まで、軍医や看護師が負傷兵の治療に当たった病院として機能していました。現在中に入ることが出来るのは、壕の一部ということで、20号を見学しました。壕の形は縦長で、通路がずっと伸びており、所々で十字路があり、隣の通路ともつながっていました。通路の幅は狭く、通路の片側には簡素な二段ベッドが置かれていて、そこで負傷者が寝ていたようです。二段ベッドがあることにより通路は狭く感じられ、中はじめじめしており、決して居心地の良い場所ではありませんでした。こんな劣悪な場所で負傷者が治療を受けていたと思うと、74年前に本当にあったか疑ってしまうほどでした。さらに、そこではなんとも雑で不十分な治療しか、負傷者は受けることが出来なかったということを知りました。手や足などに傷を負っていると、傷口から観戦するのを防ぐという理由で、手足の切断が日常的に行われていたという話を聞き、ゾッとしました。手足を切断される平氏のうめき声が壕内に響き渡り、治療を控えている兵士にこれ以上ないほどの恐怖が降りかかっていたという状況を想像すると、本当に戦争は恐ろしいものだと思います。そして、手足の切断に関しては結局のところ、切断によりできた傷口から細菌が感染することもあったみたいで、あまり効果的ではなく、正しい医療行為を施すところではないのが、当時の戦争か状況であるということを知りました。また、アメリカ軍が南の方へ侵攻してくると、日本軍は南部撤退をすることになり、南風原の壕にいる重症患者は、連れていけないが故に、青酸カリによる自決を強要されたという話も聞きました。足手纏いは捨てるというあまりにも非人道的なことが、戦争では当たり前のように行われてしまうということを知り、悲しさや怒りといった、なんとも言えない感情が湧き上がってきました。

それから壕の入り口では、実際に落ちてきた爆弾の破片を手にとることができました。爆弾の破片を手にとるという体験は初めてで、持ってみたのですが、砲丸投げの砲丸よりもずっしりとしていて重く、体感的に「爆弾が体に当たったら必ず死ぬ」と思いました。重さ(質量)で戦争の怖さを感じることができた体験であり、南風原では当時の状況を今まで以上に想像できました。

沖縄研修4日目

嘉手納基地を訪れて最初に思い浮かんだこと言葉は「ここは日本ではないみたい」です。訪れたその日は、土曜日ということでアメリカ軍機はあまり飛んではいなかったのですが、それでもちらほら飛行機が飛んでおり、雰囲気は日本ではありませんでした。嘉手納基地は日本でも関西国際空港に匹敵するくらいの滑走路を持っており、とにかく大きかったです。大きい故に、軍施設も充実しているそうで、嘉手納基地から飛行機が北朝鮮の不審船を探しに日本海へ飛んでいたり、中国の動きを探りに南シナ海へ飛んでいたり、はたまたオーストラリア機が嘉手納基地に飛んできたりしているそうで、外交に直結する場所であるということを知り、自分の目で見て感じました。また、嘉手納基地を訪れた後は、ニュースや新聞でよく取り上げられる普天間基地を訪れました。普天間基地は嘉数の高台から見たのですが、とにかく滑走路と住宅地の位置が近くにありました。実際に自分の目で見てみることで、

普天間基地が「世界一危険な基地」と呼ばれていることにも納得できるほどでした。現在辺野古埋め立て問題で普天間基地の移設が微妙ですが、普天間基地が今のようにあるということは危ないと感じるものの、辺野古に移り、また沖縄が基地を負担するのも問題であり、改めて移設の問題は難しいと感じざるを得ませんでした。今も沖縄がアメリカに大きく影響を受けているということを強く感じたのが、嘉手納基地と普天間基地の訪問でした。



沖縄研修 5 日目

5 日目で印象に残った場所は荒崎海岸です。荒崎海岸では沖縄戦当時の状況を再現するようにロールプレイングを行いました。目の前は大海原であり、サーファーが海岸にいて、とても綺麗なというのが荒崎海岸の印象でしたが、当時はその海をアメリカ軍の艦隊が埋め尽くしていました。さらに海岸の後ろにはアメリカ陸軍が迫っていました。沖縄の南端に位置する荒崎海岸ではアメリカ軍に挟み撃ちにされ、身動きの取れない住民・学徒・日本軍が入り乱れていました。僕はゴツゴツとした岩場の荒崎海岸で日本軍兵士の役をしました。無謀でも戦い続けるのか、自決するのか、投降するのか、判断を迫られるというシチュエーション。実話に基づき、一人の日本軍兵士が投降しようとし、仲間の日本軍兵士に銃で打たれ一人の兵士が死んだ後という設定でした。「自分が兵士であったらどうするか」を考え自分が出した答えは「無謀でも戦い続ける」です。現代の視点から見れば僕は間違いなく、兵士であっても投降することを決断するのですが、当時のことを想像すると、冷静な判断が

できない心持ち・環境にあったと思います。軍人は戦うという大義名分があり、絶対に投降することはできないだろうと荒崎海岸で思いました。「投降する勇気・生き延びる勇気より戦争が作り出す空気の方が強い」と感じ、戦争は再び起こしてはいけないと強く思ったのが、荒崎海岸という場所でした。

まとめ

沖縄で研修に参加して感じたことは「僕たち若い世代は戦争のことをほとんど知らない」ということです。よく「戦争のことを忘れるな」という表現を聞きますが、若者はそれ以前に戦争のことを知りません。戦争のことをまず知ろうとすること、知ること。実際に現地へと足を運び、感じる。これらのことが大切であると身に染みるほど感じました。そして、歴史を知った上で考え、行動し、今を生きる。それから未来を創っていくのが僕らの世代の使命であるのだと感じました。まずはもっと、当時の戦争について知ろうとすること、知ることから始めようと思う沖縄研修でした。

フィールドワークの大切さー「沖縄を歩く」を通してー

国際学部国際学科2年

池田 千夏

私が「沖縄を歩く」に参加して、1番学んだことはフィールドワークの重要性だ。このプロジェクトでは、大半の日程を徒歩でこなし、行く先々で戦争体験者の話を聞くことができた。わかっていたことではあったが、終了してみて改めて、この体験の貴重さと重要性に気づいた。

最初は遠足気分で楽しくできていたこのプログラムだったが、雨が降り、疲れが溜まっていくうちに楽しくなくなっていく。どんどんおしゃべりも減り、楽しみもなく、無で歩く時間が続いていった。食事の楽しみさえも奪われているので、ただただ辛いものだった。だが、それをしばらく続けていくと、沖縄戦の被害者の人たちの思いを想像する余裕ができていた。「自分が歩いている道は、人が倒れ、死に、それを踏み潰して歩いていた道」という言葉が思い起こされた。戦闘機と爆弾に覆われた空を、戦艦やアメリカ兵で埋もれた海を想像して歩いてみた。沖縄戦を体験した人たちの思いを「理解する」ところまではいかなくても、「想像する」ことはできたように思う。

特に想像することができたのは、めしあげの道を見た時だった。ちょうど雨が降っていて、道はぬかるんで滑りやすくなっていた。狭い歩幅で少しずつゆっくり歩くのがやっとの状態だった。当時の沖縄の女生徒たちは、ここを敵襲に脅えながら走って移動していた。時期は梅雨だ。私が歩いた時と同じ状態だったと予想される。私たちには終わりがあり休憩もあ

るが、彼女たちにはない。ガマに帰っても凄惨な状態の傷病兵たちが看護を待っている。その感情を想像して歩いた。やはり理解はできなかったが、こんな思いだったろうかと考えることができた。

フィールドワークで得られる学びは、言うまでもなく大きなものだ。フィールドワークで学べるのは、知識ではなく、思いだ。自分が感じる思いの全てが学びになっていく感覚を味わうことができた。それは、部屋に籠って行う本や映像での学習では感じることのできないものだろう。

次に感じたのは、フィールドワークの貴重性と有限性だ。広島では、原爆の悲惨さを伝える資料の劣化と被爆体験者の高齢化が危惧されている。それは広島に限ったことではなく、もちろん沖縄でもそうだった。「沖縄を歩く」でも、年々体験を語ってくれる人が減ったり、見学できるガマが少なくなっていることが問題になっていた。そのことから、「戦争の体験をする」ということは、期限付きの希少なものなのだと気付いた。そして、私たちはまだ、



体験することができる世代だ。おそらく私たちが最後の歳だろう。今の10歳が大学生になる頃には、終戦後85年が経っている。戦時中の記憶がある体験者というと、100歳前後にはなっているだろう。おそらく資料の劣化も進み、被爆建物もどんどん補修され、公開されなくなっていく。そうなってしまえば、「体験の学び」を得て、研究に繋げることはできなくなっていく。平和研究をするラストチャンスが今訪れているように感じる。

私は、このことを経て、広島の平和教育を見直すべきなのではないかと思った。現在の

広島での平和教育は、毎年一回か二回、1時間程度のものだ。内容は、平和記念式典の中継を見たり、平和関連の映画を見たり、資料を読むなど、あまり充実したものとは言えない。そこにもっとフィールドワークを導入すべきだと思う。平和記念資料館に遠足に行くだけでなく、原爆ドームを下から眺めるだけでなく、もっと今しかできないことをすべきなのではないだろうか。被爆建物の見学をしたり、実際に被爆者を訪ねたりすべきだと思う。そうでないと、本当の学びは得られないのではと思う。そして、このようなフィールドワークを行えるのは、今がラストチャンスなのだ。

では今、私がすべきことはなんだろうか。できることはなんだろうか。体験者の高齢化を食い止めることはもちろんできないし、資料の劣化を食い止めるのは技術を持つ人が努力することだ。私はただ学ぶことしかできない。今ある学習材料を最大に生かし、最後の「戦争を体験できる」世代として、しっかりと学ぶことしかできないのである。それに気づいたとき、私はこの期限付きの学習に、とても興味を持った。平和都市広島の、平和研究所がある市立大学で、今学ぶ意義がある平和研究をしたいと心から思った。そしてできることなら、広島に於ける平和教育と平和関連の観光の活性化を志したいと思うようになった。

私たち、「最後の世代」に課された問題は、これからの平和教育の在り方についてだと考える。私が、願い通りにこの問題に携われる頃には、前述の通り、「体験型の平和学習」はより厳しいものになっている。沖縄に訪れたことでこの問題は私の心に深く刻まれ、どこか責任感と使命感を感じた。